
ときめきの心拍数

ミスタ〜forest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ときめきの心拍数

【Nコード】

N9146A

【作者名】

ミスタ〜forest

【あらすじ】

どうしようもなく心臓がドキドキして、刹那さえも永久に思えて、なかなか吐露出来ない想いに囚われた時、あなたはどうしますか？

前途多難な前奏曲 その一

可能な限り、長く生きたい。

恐らく、大抵の人はそう願っているだろう。

だからこそ健康番組が不滅なのだろうし、医療技術も発達してきた。

生を望むから死を畏れ、故に死後の世界を信じる様になった。

生まれた理由も判らぬまま、理由も判らず生きて生かされ、理由も無く死んでいく。

そんな無常の理由を知りたいからこそ、より長い生を望むのかも知れない。

だから、もしも、

「アナタ……このままだと早死にするネ」

下校中の高校生が、突然こんな事を宣告されれば、戸惑うのは必然だろう。

おとなしなおと
音無直人は、少なからず戸惑っていた。

高校からの帰り道で、突然見知らぬ人に早死にを宣告されたのだから。

しかも、その相手は、今の日本ではまず有り得ない格好をしているのだ。

恐らく、自分と同じ、十七歳くらいの少女。

身長は百六十に満たないくらいで、スタイルは……良く言えばスレンダーである。

問題はここからで、服装は赤いチャイナ服。

丈はそれ程長くないので、動き易そうだ。

髪は団子にしており、見た目は殆ど中国人である。

テレビや本では何度も見たが、正直、現実に日本で見られるのは、

精々中華街くらいだろうと思っていた。

そんな彼女に、

「アナタ……このままだと早死にするネ」

などと言われれば、堪ったものではない。

——何なんだ、こいつ……？

相手するのも馬鹿馬鹿しいので、直人は無視して去っていく。

「あ！？ ま、待て下さいヨ！」

途端、彼女は情け無い声を出し、直人を追う。

付き合ってられないので、直人は少し速歩きになった。

歩きながら、彼女に面識があるかを改めて考える。

自分に早死にを宣告する様な中国人が、自分の知り合いに居ただろうか。

答えは、数秒で出た。

——知らないよ、あんな奴……。

「せ、せめて話だけでも聞くネ！ 他人の話に耳傾けないの、良くないアルヨ！」

どうにか直人に追い付いた少女が、言い聞かせる様に言う。

台詞だけならともかく、彼女に言われても説得力が無い。

直人は更に歩を速め、少女を引き離した。

少女も負けじと、更に早足になろうとするが……。

「きょうッ！？」

直人の後ろの方で、ベチツと鈍い音が聞こえた。

悲鳴から、例の少女が転んだという事が想像出来る。

直人は溜息を吐き、彼女の方を向く。

そこには、つんのめって倒れている少女。

多分、顔面も打ってしまっているだろう。

流石に放っておけず、直人は彼女に歩み寄る。

「……大丈夫か？」

手を差し出すと、彼女は顔を上げた。

直人の推測は、目尻に浮かんでいる涙で立証される。

「い、痛いアル……」

当然であろう感想を述べ、彼女は直人の手を取った。

直人に引き上げられる様に立ち上がり、服を軽く叩く。見ると、膝に小さな擦り傷が出来ていた。

「わ、悪かったな……」

特に何かした訳でもないのだが、直人は反射的に謝っていた。

少女は、痛みを誤魔化す様に笑う。

「いや……私も悪かたネ。ちょっと話が唐突過ぎたアルか？」

そして、以外と気さくな表情と声で尋ねてきた。

当然、最初の言葉の話をしているのだろう。

確かに、余りにも突飛な話だし、ツツコミ所は多々在る。

だが、自分に危害を加える程に、狡猾な少女ではなさそうだ。寧ろ、彼女こそ質の悪い業者に引っ掛かりそうな印象である。

念の為、直人は軽く彼女を試してみる。

「あ、棒棒鶏が包子と一緒に中華鍋に乗って空飛んでる」

「ま、マジアルカ！？ どの辺ネ！？」

引っ掛かるどころか、搾り尽くされてしまいそうだ。

これでは、人を騙そうなどという思考すら持ち合わせていないかも知れない。

甘い判断かも知れないが、少なくとも悪気は無いのだろう。

そう思った直人は、彼女の怪我が気になりだした。

少しは自分にも責任が有るかも知れないし、怪我している女性を放つていくのも、男として心が痛む。

それに、自分が短命だと言い張るのであれば、詳しい話も聞いてみたい。

第一、ここで逃げて、また追われる事が無いと言い切れない。ならば、取り敢えず相手が満足するまで話を聞き、適当に同意するなり論破するなりした方が良さそう。

「……その怪我放つとくのも不味いし、家近いから、軽く手当でもしようか？」

直人の思惑を知らない少女が、そんな提案に同意するのに、それ程時間は掛からなかった。

「申し遅れたネ。私、鈴鈴りんりん言うアル。よろしく頼むヨ」

「……………」

家に向かう途中。

鈴鈴と名乗る少女の自己紹介に、直人は言葉を失った。

彼女の名前が、まるで中国人の様だったからだ。

「お前、いくら何でもそれは嘘だろ。精々『中華風』が良いところだ」

「……な、何で判たアルカ？」

直人が疑いの言葉を掛けると、鈴鈴は簡単にそれを認めた。

どうやら、見破られる事は無いと思っていたらしい。

凶星を衝かれると弱いと判断した直人は、

「さっきの話も嘘だろ？」

ここで一気に論破を試みる。

「そ、そんな事無いネ！ あれは本当アルヨ！」

流石に、この程度では破られない様だ。

直人の懐疑的な態度に、鈴鈴は少し怒気を孕ませた声で説明する。

「この地球で一番多くの人が使ってる言語、実は中国語アル。

しかも、最近の中国の発展はスゴイネ。先進国に迫り付く勢いヨ。

だから私、頑張て中国語覚えたアル。鈴鈴は中国での名前。本名は鈴木すずきネ」

「思いつきり日本人だな、名前……」

だったら今は鈴木って名乗れよ、というツツコミを、直人は胸に仕舞った。

それ以上に言わなければならぬ事に、気付いてしまったから。

訊くのは躊躇われるが、これは彼女にとって大事な事だ。

「……お前、もしかして……今話してるの……？」

「……………？ 中国語アルが、どうかしたカ？」

事態は、最悪だ。

まさか、語尾に『アル』や『ネ』と付ければ中国語になると思い込んでいる人が本当に居るとは。

メディアの力の恐ろしさを、まざまざと見せつけられてしまった。ここで、二つの選択肢が、直人の脳内に浮かぶ。

このまま黙って、彼女が中国で困るのを待つか、それとも……。

答えは、案外簡単に決まった。

知り合ってしまった以上、彼女の恥は自分の恥と同義だ。

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。

彼女の耳には痛いかも知れないが、これも自分なりの優しさ。

彼女には、甘んじて受け入れて貰おう。

大丈夫。彼女なら、まだやり直せる筈。

「難しい顔して……どしたネ？」

怪訝な表情を浮かべる無垢な瞳に、直人は告げた。

「お前が今話しているのは……明らかに中国語じゃない」

その一言の後に訪れる、当て所の無い静寂。

一瞬さえも永久に思えてしまう程の沈黙。

背中のにのし掛かる重たい空気。

直人が躊躇っていた理由の殆どは、この瞬間にあったと言える。

「……は……は……何言てるアルカ。」

私が漫画で見た中国人は、皆こんな風に話してたネ」

「だったらお前、何で日本人と会話が成立するのか言ってみろよ」

予想通りの反論に、直人は止めの一言をぶつけた。

二度目の静寂。

「……マジカ？」

「マジだ」

「……………」

どうやら、彼女の脳内で、大規模なルネサンスが急ピッチで進められている様だ。

今まで信じてきたものが間違いだったと気付いた時の衝撃は、如何程のものなのだろうか。

鈴鈴は、暫く何かをブツブツと呟き、

「ええええええええええええええええええええええッ！！！！！！？」
地平線の向こうまで届きそうな悲鳴を上げた。

『音無』の表札が掛かった一軒家の前で、直人は立ち止まった。

「ここが俺の家だ。取り敢えず上がれよ」

「……………」

直人が声を掛けて数秒の間。

鈴鈴はハッと我に返り、愛想笑いを浮かべた。

「そ、そうアルカ。じゃあ失礼するアル」

どうやら、脳内でルネサンスモラトリアムが実施されたらしい。

およそ何事も無かったかの様に、鈴鈴は応えた。

心の傷跡は、容易に垣間見えるが。

「ただいま」

直人が玄関のドアを開けると、すぐ側のドアが開いた。

「あ、おかえり、にーちゃん」

「遙、救急箱の用意頼む」
はるか

間延びした声で出迎えた遙に、直人は即座に指示する。

事態が飲み込めず、遙は首を傾げた。

「別に良いけど、にーちゃん別に怪我なんて…………！？」

円らな瞳にある物が映り、遙はそのままの顔で固まる。

その視線の先には、怖ず怖ずと音無宅に上がる鈴鈴。

「…………お、お邪魔するネ」

それを敵視と感じたのか、鈴鈴は気まずそうに頭を下げた。

だが、それよりも勢い良く、そして深く、遙は頭を下げる。

チョコレート色のセミロングが、頭にぶら下がっている様な状態になった。

そんな遙に、鈴鈴はもちろん、直人も怪訝な表情を浮かべる。
頭を下げたまま、遙は震える声で言った。

「あ、あの、この度はにーちゃんを貰って頂き、誠にありがとうございます！
ざいます！」

高嶺の花に現を抜かしていたにーちゃんに何があったかは存じませんが、どうかご贔屓に！

にーちゃんは恐らくこういう経験が初めてだと思われるので、多少のデリカシーの無さは目を瞑って下さい！

あと……ぼ、ぼくは音無遙です！ にーちゃんが不躰な事をしでかしたら、ぼくが責任を持って……」

どうやら何か大きな勘違いをしているらしく、意味が良く解らない長話になる。

百五十にも満たないであろう小さな身体は、緊張で強張っていた。
話の最中にも関わらず、鈴鈴は直人に耳打ちする。

遙は色々と一杯一杯の模様で、そんな事には一切気付かない。

「アナタ、ボク娘萌えか？」

「違う」

「なら、義妹萌えアルネ？」

「違うって」

「だったら、ロリ」

「止め刺しても良いんだぞ鈴木」

前途多難な前奏曲 その一（後書き）

初めての方は始めまして。

「暑さも寒さも彼岸まで」などを読んで下さっている方は毎度どうも。

この度、無謀にも新連載を行う事に相成りました。

かなり無計画な見切り発車なので何がどうなるかサッパリですが、見守っていただければ幸いです。

正直、中華を書きたかったんですね。本当にそれだけ（あ

前途多難な前奏曲 その二

「痛ッ！ い、痛いアル！ もっと優しくするネ！」

「我慢しろ、このくらい」

音無宅のリビング。直人は、鈴鈴に傷口を洗わせ、消毒していた。消毒液を染み込ませた脱脂綿で傷口に触れる度に、鈴鈴はビクツと身体を震わせる。

涙目になって訴える彼女に適当に應對しながら、直人は淡々と消毒を続けた。

「にーちゃん、女の子が痛いって言った時は、優しくしてあげないと。」

独り善がりで乱雑にヤツてると、逃げられるよ？」

そんな様子を見ていた遙が、半ばからかう様に言う。

「五月蠅い。ついさっきまで変な勘違いしてたくせに。」

十四歳で色気付きやがって、このマセガキ」

「なっ……！ にーちゃんが初めて女の子を持って帰って来たから、ちよつと期待しただけだよ！」

「そんな事考えるのがマセガキなんだって」

「にーちゃんだって、鳴っちを淫らな妄想で汚してるでしょ！？」

「何でお前が、鳴子ちゃんにそんなあだ名付けて……」

口喧嘩になった二人を、鈴鈴は交互に見付めていた。

そして、彼女が達した結論は、

「仲が良い兄妹アルネ。見えていて微笑ましいヨ」

二人の闘志を削ぐには充分だった。

屈託の無い笑顔で、心底羨しそうに言われたので、言い返す気にもなれない。

以降、直人が絆創膏を貼り終えるまで、静寂が部屋を満たす。

「ほら、終わったぞ」

手当てが終わり、直人は大きく息を吐いた。

ピンセットを救急箱に仕舞い、それを遙が押入れに仕舞いに行く。鈴鈴は膝を曲げ伸ばしし、調子確かめた。

「どうやら、特に問題無いらしい。」

「感謝するネ。見知らぬ人をわざわざ手当てする人、初めて見たヨ」素直に頭を下げる鈴鈴を、直人は意外そうな目で見ていた。

あれ程失礼な事を言った少女を、今の彼女と同一視出来ないのだ。出会いがアレでなければ、普通の可愛い少女として接していたかも知れない。

だが、それは叶わなかった。

だから、

「お前は、一体何なんだ？」

直人は鈴鈴に追及した。

鈴鈴は、微笑みながら答える。

「さきたも言た通り、アナタこのままだと早死に。だから、私が助けてあげるネ」

「……どうやって？」

直人が尋ねると、鈴鈴は軽い笑顔を見せて答えた。

「大丈夫。私がアナタの生活を監視するだけヨ。」

生活を見直せば、アナタ、まだまだ長生き出来るネ」

その言葉の後、少しだけ沈黙。

そして、直人は鈴鈴の顔を片手で掴んだ。

グアシという効果音が似合う、アイアンクローの構えである。

「喋れなくなるか、警察に連れて行かれるか、どっちが良い？」

「ひゃ、ひゃめて下さいヨ！」

半分冗談で、つまり半分は本気で迫る直人に、鈴鈴は半泣きの表情を浮かべた。

顔を掴まれているので、鈴鈴は口が思う様に動かせない。

その時、遙が押入れから戻ってきた。

「ちよっ、にーちゃん、何してるの!？」

遙は鈴鈴と直人の間に割って入り、赫怒の表情を直人に向けた。

「女の子に乱暴しちゃダメでしょ！」

「いや、こいつがうちに居座るとか言い出すから」

「……え？」

直人の返答に、遙はきよとなる。

もう一度問い、直人が頷くのを確認すると、今度は鈴鈴の方を向いた。

「……本当？」

「本当ネ」

鈴鈴の意志を確かめ、遙はその場で考え込む。

流石に、今会ったばかりの人を泊めるのには抵抗がある様だ。

「えーと……取り敢えず、理由くらいは聞かせてくれるよね？」

遙の問いに、鈴鈴は言い難そうにする。

そもそも、直人に『早死にする』と告げたのが全ての発端なのだ。

言えなくて当然だろう、と直人は思う。

だが、意外にも鈴鈴は口を開いた。

「理由は色々あて、全ては言えないが……」

私、今、住む家が無いアル。このままだと、今日は野宿になるアルヨ」

「また突飛も無い嘘を……」

「中国人、嘘吐かないヨ！」

直人の疑いの目に、鈴鈴は激しく反発した。

話の腰を折ったので、遙からも非難の眼差しを浴びる。

中国人と言いつ張っている事自体が既に嘘なのだが、それは胸の内に仕舞う事にした。

「こんな可愛い娘が宿無し？　どういう事か教えてくれないかな？」

「それは……その……」

更に遙に問われ、鈴鈴は少し躊躇った後、やはり口を開く。

「実は私、幸せになれるという壺をこの前買ったアル。」

けど、幸せらしい幸せも無く、逆に壺代でお金が無くなってしまったネ。そうでなくても、断り切れずに十一の新聞と契約してたから、当然

ヨ。

その前にも、四川省旅行券が当たたと電話が来て、言われた場所に行たら、訳の解らない物買わされたネ。

街でお姉さんに声を掛けられて、アンケートに答えていたら、いつの間にか強面に囲まれていた事もあたヨ。

それで、家賃を払えなくて、とうとう家を追い出されたアル」

家庭科の教科書ぐらいでしか読んだ事の無い体験談を話す鈴鈴に、直人は言葉も出ない。

確かに、『悪い業者に引ッ掛かりそう』とは思っていたが、これは想像以上だ。

そんな彼女を形容するのに相応しい二文字の言葉が、直人の頭を過ぎる。

口にするのは躊躇われるが、言わずにいられなかった。
今言わなければ、これから言う事が出来ないだろう。

「ちなみに、この中国語は、街で声を掛けられて買った教材で学んだネ」

「……お前、馬鹿だろ？」

少しの葛藤の末、直人はそれを口にした。

彼女にこそ、この称号は相応しいと思ったからだ。

「そ、そんな事無いネ！　いくら何でも失礼アルヨ！」

「じゃあお前、『クーリングオフ』って知ってるか？」

直人の問いに、鈴鈴はやはり黙ってしまった。

恐らく無駄であろう熟考に、多くの時間を費やす。

そして、それがやはり無駄であった事を、直人は次の一言で知ることになる。

「……私、横文字は苦手ヨ」

「訂正。真性の馬鹿だ」

予想の斜め上を行く展開に、直人は心底溜息を吐いた。

素直にも、流石に程がある。

世間知らず、と言い直しても語弊は無いだろう。

この世の中、他人を疑う事を少しは知らなければやっていけない。
全て、彼女の自業自得なのだ。

こんな奴の為に、気を揉んでやる必要も無い。
そう言おうとして、直人が遙の方を向くと、

「……うるうる」

自分で効果音を放ちながら、目を潤ませていた。

「……遙？」

「か、可愛そう……」

「はあ？」

遙の口から出た一言に、直人は戸惑いを隠せない。

今の話を聞いて、同情の念を抱くなんて。

そんな彼の方に、遙は涙目を向ける。

「だって、今時珍しい天然だよ！？ アホの子だよ！？

きつとあの娘の脳内は未だに、キスしたら妊娠するとか、赤ちゃんは好き合っている夫婦の所に運んでくるとか、
そんな感じの嬉し恥ずかしイノセントワールドが広がっているんだよ！」

「いや、いくら何でもそんな訳」

「え！？ 違うアルか！？」

「あったよ……」

どうやら、遙の『スイッチ』がオンになってしまった様だ。

こうなると、もうまともな手段では止まらない。

「言えない！ ぼくの口からは言えないよ！」

安全日の計算を間違えたり、安物のゴムを使ったり、若さ故の勢いでやったりした時に赤ちゃんが出来るなんて！」

「何でそんなネガティブな生産過程しか浮かばないんだよ……」

幸い、鈴鈴には言葉の意味が解らなかった様である。

直人のツツコミも無視して、遙は更に続ける。

「こんな無垢で天然で純粋で頭がユルい鈴ちゃんが、現代社会の荒波に揉まれて、セクハラ上司に胸を揉まれて、

人生の甘いも辛いも知り尽くして、夜の蝶として『シャチヨさん、イイコ揃てるアルヨ』何て言いながら、

中年サラリーマンを金蔓にする様を想像出来る!？」

「そうだな。想像出来ないな。お前の脳内構造は」

段々、直人のツツコミも投げ遣りになってきた。

にも関わらず、遙はまだまだヒートアップしていく。

二人の温度差を考えると、本当に同じ親から生まれたのかさえ怪しく思えてきた。

「とにかく! そんな訳で、鈴ちゃんはうちに住んで良いから。ぼくが保護するから」

「マジアルか!？」 感謝の極みネ!」

無理矢理意見を押し通そうとする遙に、鈴鈴は嬉々とした表情を浮かべた。

『保護』という時点で既に人間に対する扱いではない事には、気付いていない様だ。

「お前本気か? こんなどこの馬の骨とも判らない奴を住まわせるなんて」

「パパとママが赴任先から帰ってくるまでは、ぼくに家主の権利が有るもん」

半ば呆れながら尋ねる直人に、遙は当然の様に答えた。

確かに、家事の大半は遙が担っている。相応の権利を持つのも妥当だ。

しかし、それでもこの決定は横暴である。

「そういう問題じゃないだろ。住む場所が無いなら、もっと適した場所に行かせるべきだ」

「ヤダ。鈴ちゃんは天然のまままで居て欲しいもん」

「そんな事言ったら、これから何人をうちで面倒見る事になるんだよ?」

『スイッチ』が入っている状態だけあって、遙は駄々っ子の様に意見を曲げようとはしない。

でも、ここで折れてしまつては、遙の為にもならないだろう。そう思った直人は、あくまで毅然とした態度を取り続けた。

「にーちゃん……ぼくがこんなに頼んでるのに……どうして……」
「う……」

頬に一筋を伝わせる遙に、流石に直人もたじろいだ。

こういう場合、泣かせた方の分が悪くなるのがお約束。

正面突破を諦めて、泣き落として攻める魂胆なのだろう。

感情の起伏を、ここまで自在に操るとは。

演劇部の名前は伊達ではないという事か。

だが、ここで従つては遙の思う壺。

多少良心を痛めても、引き下がる訳にはいかない。

「泣いても駄目なものは駄目だ。ペットを飼うのとは訳が違ふんだぞ」

直人は、キツパリと言い放った。

それでも食い下がるのなら、その都度はね除けるだけだ。

しかし、意外にも、遙は次の手を仕掛けようとはしない。

泣き落としまで使うのだから、まだまだ手段が有ると思つていたのだが。

拍子抜けする直人に、遙は背を向けた。

「そう……だよね……ひっく。泣いて……うっく……許して貰える訳……っく。」

ゴメンね鈴ちゃん……ぐす……ぼくはもう……ひっく……これ以上力には……っく」

何度も嗚咽を漏らしながら、遙は申し訳無さそうに話す。

最後の抵抗かも知れないので、直人は気を抜かなかった。

「そろそろ……うっく……夕食の準備が……ひっく。」

すぐに済ませるから……っく……間食したら嫌だよ……ぐす……」

そう述べる、遙はキッチンへ向かった。

直人は安堵し、鈴鈴を連れて玄関へ向かう。

住ませる訳が無い。

「本当に良いアルか？
あの娘、まだ泣いてるヨ」

玄関に居るといふのに、まだキッチンから遙の鳴咽が聞こえてくる。

「うつく……ひく……ぐす……ひつく……つく……うつく……く……
け……」。

[illegible]

鳴咽から一転、不気味な嗤い聲が聞こえ、直人も鈴鈴も戦慄を覚える。

そう考えた時、直人の脳内に、ある光景が過ぎる。

遙が作った夕食を、何をどうやって作ったのかも判らない夕食を、間食せずに空かせた胃袋の求めるままに食らう自分の光景である。

それと同時に、自然と口が動いていた。

「俺が悪かった！ こいつ住まわせて良いから！ 寧ろ住まわせてくれ！」

直人の叫びから数秒後、リビングのドアが開き、

「本当！？」

遙が無邪気な笑顔を覗かせる。

完全に弄ばれた事を悟り、直人は草臥れた溜息を吐いた。

前途多難な前奏曲 その二（後書き）

誘惑に負けて買いました、ポケモンダイヤ。

DS持っていないので、弟や妹のを（勝手に）借りてやってます。

主人公の名前は、『ダ・カーポ2』より『ななか』。

ライバルの名前は、その場の勢いで『かませいぬ』。

ハマり過ぎて、パソコンしている時もプレイしているのですが、二つ同時はやはり難しいですね。

DSのAボタンを押そうとして、パソコンのエンターを押してしまいましたよ。

……はい、以上のどこにツツコミを入れたかによって、貴方の深層心理が（判りません）

それはさておき、ときめきの第二弾です。

頭のユルいチャイナとか、演技派の腹黒とか、ひぐらしのパロとか、本当に好き勝手書いています。

遙のスイッチがオンになる辺りからは興に乗って、二日で書き上げてしまいましたね。

次辺りで、ようやく鈴鈴が直人に近付いた目的が明らかになる……かもです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9146a/>

ときめきの心拍数

2010年10月11日12時44分発行